

スザン・バーレイ／さく・え

『わすれられないおくりもの』

をめぐって

高原 典子

はじめに

我が子が幼いころ、「読んで」という声に誘われて、よく一緒に絵本を読んだものでした。すると、子どもたちはムシャムシャと片つ端から絵とお話を食べてしまって、それから満足して眠りにつきました。その子どもたちも、今はもう幼児期から遙かに遠ざかり、「読んで」ということはほとんどなくなりましたが、新しい絵本に限って、読み手は相変わらず私です。というのは、今でも「絵本だけは読んでね。そうじゃないと絵が見られないうから」といつて、大きな身体を珍しくそばに寄せてくるからです。すると私も、あの日なたの匂いのするおかつばをひざに抱いていたころに、たちまちタイムス



リップし、絵本を読み始めてしまいます。

でもその後、折りにふれてとり出し、私一人で見入る絵本もあります。その一冊がスザン・バーレイの『わすれられないおくりもの』です。

「死」との出会い

バーレイの絵は、「バヂャー一家」のテレビコマーシャルでお馴染みのものですが、それを作るきっかけになつたのがこの絵本だったそうです。確かにドローイングのペン画、それにふさわしい淡やかで透明感のある色彩。特に空が驚くほど表情をもつていて美しいのです。擬人化された動物たちは各々の動物らしさを寸分も失わず、それでいて情感あふれる人間的な生活を営んでいます。

また、各場面の絵の構成が、どれも中心部の辺りに円を描く形になっているので、温かな雰囲気が生まれるのでしょう。

さて、お話を主人公は、困っている友だちにはいつでも助けの手をさしのべる心やさしいアナグマです。彼

は、「たいへん年をとっていて、知らないことはないというぐらいもの知り」でした。自分の死期がそう遠くはないということも知っていました。けれども彼は魂の不滅を信じていましたから、自分のことを心配するよりも、あとに残る友だちのことが気がかりで、自分が死んでもあまり悲しまないよう、と願っていました。この老賢人の背中のまろやかでなんと魅力的なこと！

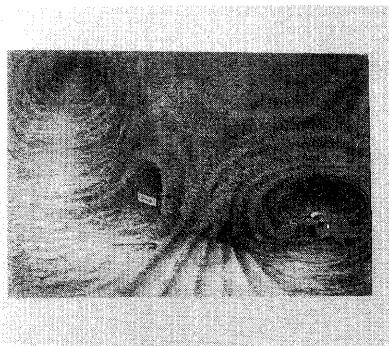
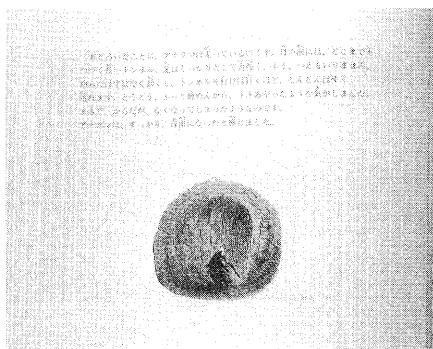
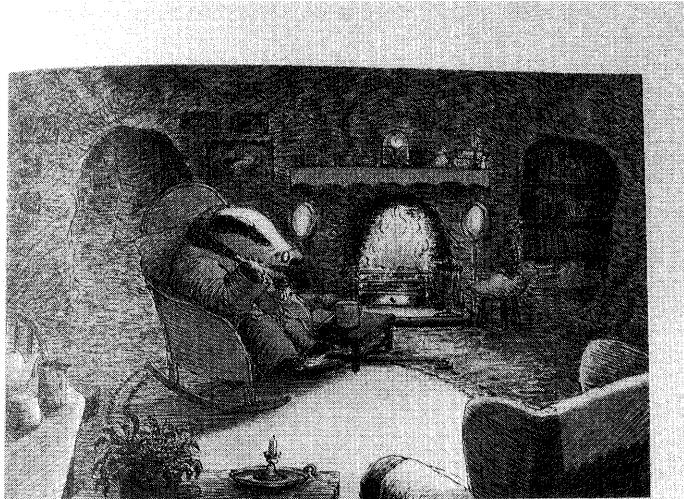
ある晩、アナグマは月に「おやすみ」をいって、手紙を一通書いたあと、ゆったりとゆりいすに腰かけます。

(図版1) アナグマの部屋の奥には書棚があり、壁には絵がかかり、暖炉の火は赤々と燃えています。その火はアナグマを温もらせるだけでなく、その心の温かさをも象徴しています。ですからこの部屋は読み手を温かく迎え入れ、くつろがせると同時に、アナグマには安らかな死を与えるという両義的な意味を持つてているのです。バーレイはその部屋のようすを丹念に描き、生きているアナグマの最後の日常を一瞬のうちに照らし出して見せます。

▲図版1

『わすれられないおくりもの』

(評論社) より



▲図版2 『わすれられないおくりもの』(評論社) より

ゆりいすに揺られているうちに、アナグマは夢を見ます。

目の前に続く長いトンネルを行く夢。（図版2）こ

「長いトンネルの向こうに行くよ。

さようなら アナグマより」

のトンネルは、いうまでもなく、死という異世界への通路です。今までにも通路を通つてファンタジー世界へ行つた主人公は、たくさんいました。そしてアリスも、ベンシ一家の四人兄妹も再び現実に戻つてきます。でも生と死の隔てにおいては、伊耶那美^{いざなみ}の命^{みこと}のように黄泉^{よみ}の国から帰ろうとすることは許されません。そしてアナグマも戻つてはきませんでした。

トンネルを行くうち、彼は「すっかり自由になつたと感じ」、杖一老いてからは体の一部であつた一を置いて、軽やかに走り出します。死は確かに、生から自由になること。とりわけ、日増しに不自由になる肉体から解放されることです。バーレイはこの場面で、彼女の内面で昇華された死生観をみごとに描き出しています。

翌朝、アナグマの異変に気づいた友だちは、すぐに彼の家を訪ねます。するとそこには、アナグマの死と、遺書ともいべき手紙がありました。

ここから森のみんなの悲しみが始まるのです。日ごろ、アナグマ自身は、「死んで体が無くなつても、心は残る」と信じていました。ですから死を予感しても静かに対処し、手紙を書き残すことができたのかもしれません。でも、周囲のみんなにとって、アナグマの死はやはり突然でした。それまでに、「いつか自分が死んでもあまり悲しまないよう」、といわれたことがあつたとしても、現実に生きているアナグマを目の前にして、どうやってアナグマ「不在」の感覚を身につけ、準備することができたでしょう。私どもは皆、自分、あるいは愛する人の死に対して、天から与えられる死期を甘受するしかないのです。たとえ医学や栄養学を駆使して、死期をほんの少し先に延ばすことはできても、死がある日、あるとき、天から与えられるものであるという事実を作することはできません。ですから、どんな死も大なり小なり「突然」なのです。

とりわけ、それが愛する人の場合、死を受け容れるこ

とは至難の技となります。たとえば、おさな子が死神に

連れ去られたとき、アンデルセンの「ある母親」は、澄

んだ眼も美しい黒髪も我が子の行方を知るために与えて

しまい、盲目、白髪となつて、どこまでも死神を訪ねて

行きます。愛妻を亡くした高村光太郎は、もう自分の作

品に熱愛のまなざしを注いでくれる人はいない、という

空虚感に悩まされ、しばらくは製作意欲さえなくしてい

ました。中勘助は運命の苦楽を共にした義姉を失い、隨

筆集「蜜蜂」をしたため亡き人に語りかけます。そん

なふうに愛する人の死に出会い、その人への想いを形象

化した作品は数多くあります。妹を哀惜する宮沢賢治の

作品群しかり、バーレイのこの絵本しかりです。

彼女は来日インタビューで、「絵を描き上げれば上げ

るほど、亡き祖母への想いを強く感じた。この絵本は祖

母のために描き上げた一冊といえるかもしだい。」と

語っています。その言葉のとおり、バーレイは、自分自

身の想いをモグラーアナグマを最も愛しているーに託し

アナグマの遺産

アナグマの死とともに、森にも冬が来ます。雪は地上

をすっかりおおいかくしますが、モグラの、そしてみん

なの悲しみは、カバーされるどころか、いや増すばかり

でした。季節としての冬は、最愛の友の死に打ちひしが

れるみんなの心の冬でもあります。しかし、バーレイ

は、雪の上に二輪の白い花を咲かせて、登場人物たちに

も春をもたらします。みんなは、雪どけのくぼ地に集

まって、アナグマの思い出を語り合います。そのうち

に、それぞれ、アナグマから教わったことがあるのに気

づくのです。

たとえば、はさみ使いの名人モグラは、アナグマに、

一枚の紙から「手をつないだモグラ」を切り抜く方法を

ていねいに教わりました。苦心の末、やっとできたとき

の嬉しさ！ それはモグラにとって今でも「わすれられ

ない思い出」です。カエルは、アナグマに初めてスケー

トを習いました。このときも、アナグマはモグラのときと同様、カエルが上手にすべれるようになるまで、ずっとそばについていてくれたのです。子どものころ、制服のネクタイの結び方を習ったのは、キツネでした。絵の中で、キツネは通学カバンも本も足元に放り出してします。おそらく学校で教科書を習うよりも遙かに熱心にネクタイの結び方を習ったのでしょう。

こうしてアナグマは、一人ひとりに、別れたあとでも宝ものとなるような知恵や工夫、つまり文化を残してくれました。押しつけではなく、それぞれの個性が伸びるようにと、さりげなく、しかも心をこめて必要なものを与えてくれたのです。彼が与えたのは、すでにでき上がっている「もの」ではありません。創り上げていくプロセスなのです。物質は、ときとして醜い欲望や争奪の対象となります。が、アナグマの遺産は、天にたくわえられた宝ものに等しいでしょう。

この絵本の表紙（図版3）は、たいへん印象的な場面

です。長い列の中には、アナグマに会ったことがなくて

▲図版3 「わすれられないおくりもの」

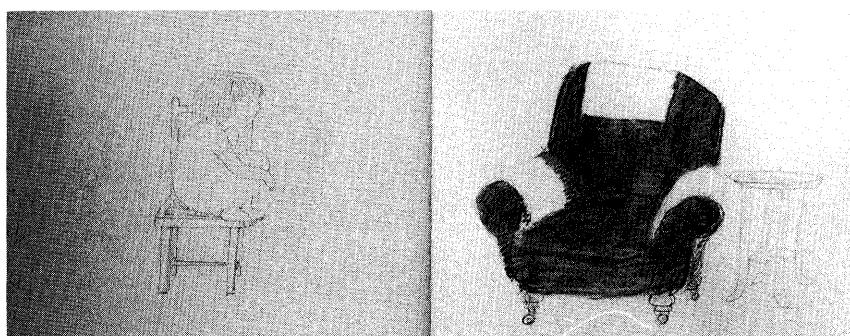


も、間接的にアナグマから教えを受け、世代を超えて贈りものを受け取ったことになる森の仲間の子孫がいることでしょう。文化を伝え合うことによつて、みんなが仲良くなごやかに暮らしていくことも、アナグマの望みのひとつだつたのです。

不在の在

それにしても、人の存在感といふものは、その不在において、却つてなんと鮮やかになるものでしようか。

バーニンガムの『おじいちゃん』では、おじいさんは孫娘を「よくきたね げんきかい?」といつも喜んで迎え、友だちのよう遊んでくれる人です。けれど、おじいちゃんが亡くなつたあと、主なぎ椅子(図版4)ほど、おじいちゃんの存在感を表すものはありません。私も祖母が亡くなつたあと、からつぼの茶の間で、それから例は少し違いますが、子どもが幼いころ、パーッと外に遊びに出ていつてしまつたあと、静寂の中で、その存在感を妙に強く感じたものでした。それは「不在の在」



▲図版4 『おじいちゃん』(ほるぷ出版) より

といふもの。つまり、かけがえのない存在であることを再認識するということでしょう。幼い子どもがひとりで留守番することをいやがるもの、母親や家族の不在によつて、いつもよりその存在を強く感じ、孤独の不安が倍加されるせいもあるかもしません。

でも家族が帰つてきたとき、その不在感は今までよりずっと大きくて新鮮な存在感になつて満たされるのです。しかし、天に召された人の不在は、その人が生きていたときの存在感を頼りに埋めるしかありません。つまりその人がどう生きたか、その人とどんな体験を共有したかということにかかるのです。

アナグマの不在感は、生前のアナグマの心にくい贈りものによつて満たされました。その贈りものを搜しあてたのは、まぎれもなくみんなのアナグマへの熱い想いだつたのです。

アナグマの老いは理想とも思えるもの。どうしたらそんな老境が迎えられるのか、アナグマに尋ねたのですが、まだ答はもらつていません。でもページを繰れば、

いつでも、木の切株に腰かけて、生きているアナグマと語らうことができるのです。それは絵本ならではのうれしさです。

『わすれられないおくりもの』スーザン・バーレイさく
・小川仁央／訳 評論社

『おじいちゃん』ジョン・バーニンガムさく・谷川俊太郎／訳 ほるぷ出版

(小田原女子短期大学講師)